

『静慮無色定大論』止観問答の研究

(要旨)

広島大学大学院文学研究科  
博士課程後期人文学専攻  
学生番号: D102486  
氏名: 青原 彰子

## 論文の目的と方法

本論文は、チベット仏教ゲルク派デプン僧院ゴマン学堂の学僧ジャムヤンシェーパ(1648-1721)が著した僧院教科書『静慮無色定大論』「止観節」の問答を分析することにより、止と観の実践を中心とするゲルク派修道論の特色を解明することを目的とする。

『静慮無色定大論』は、瑜伽行者が瞑想修行によって到達する四静慮・四無色定およびそれらを獲得するために実践される止と観に関する様々な議論をまとめた僧院教科書である。全ての議論をチベット僧院で行なわれる問答の形式で提示する点に同書の特色がある。

本論文では『静慮無色定大論』「止観節」の主な問答を取り上げる。ゲルク派の祖ツォンカパ(1357-1419)の『道次第大論』『道次第小論』「止の節」「観の節」に立脚し、チベット独特の問答論理で展開される『静慮無色定大論』「止観節」の議論を読み解き、ジャムヤンシェーパが理解する止と観の定義、止と観の本質、止と観を中心とする修道論を体系的に記述する。また、『静慮無色定大論』「止観節」が依拠する『道次第大論』『道次第小論』「止の節」「観の節」の関連記述について精査する。

これまでチベット仏教修道論の問答についての本格的な研究は皆無であった。本論文は同書の止観問答に着目し、問答形式で論述されるゲルク派の修道論が目指すものとは何であるかを明らかにすることを目的としている。

本論文は序論、本論、付論より構成される。序論ではインド仏教修道論、チベットにおける道次第思想の成立、『静慮無色定大論』の内容と問答形式について概要を与える。本論は第1章「止観の定義」、第2章「心心所相応説の観点から見る止観」、第3章「止観の修道論」の全3章および結論からなる。付論に『静慮無色定大論』「止観節」の翻訳研究を提示する。以下に本論の各章の内容および結論を要約して示す。

### 第1章「止観の定義」

第1章では止と観のそれぞれの定義を論ずる問答を考察した。

1.1「九種心住と四種の観察」では、「止」および「観」という術語の指示範囲を論ずる問答を考察した。インド仏教典籍において「止」という名称で呼ばれるものには軽安を伴う正規の止と、それを伴わない非正規の止があり、同様に「観」という名称で呼ばれるものにも軽安を伴う正規の観と、軽安を伴わない非正規の観がある。軽安を得ていない資糧道の段階で実践される聞、思、無常観、輪廻の過失を観察する出離行、菩提心を起こす修習などは非正規の止または非正規の観のいずれかに含められ、「止」または「観」という名称で呼ばれる。止観の修習は聞・思・修の内の修に限定されず、聞・思・修の全ての実践を包摂するものである。

1.2「止の定義」では、止の完成の条件を論ずる問答を考察した。瑜伽行者は九種心住の実践を通じて定義を満たした軽安を獲得する時、止を完成する。止の完成のためには軽安の獲得および三昧に対する自在性の獲得が不可欠である。定義を満たした軽安の獲得以前の三昧は非正

規の止、すなわち止に準ずるものであり、輕安の獲得以後の三昧が正規の止である。正規の止は欲界に属するものではなく、修習によって得られる色界・無色界の境地である等引地に含まれるものである。

1.3「觀の定義」では、觀の完成の条件を論ずる問答を考察した。止の完成の場合と同様に、觀の完成のためには定義を満した輕安の獲得が不可欠である。その輕安をもたらすのは九種心住ではなく、了相作意と呼ばれる伺察である。止の完成前に起こる伺察および止の完成後に起こる了相作意はいずれも輕安を伴わず、したがって非正規の觀、すなわち觀に準ずるものである。了相作意という伺察によって導かれる輕安と共に獲得されるのが正規の觀である。

## 第2章「心心所相応説の観点から見る止觀」

第2章では、心と心所（心の作用）の結びつきによって心理現象を説明する心心所相応説の観点から止と觀の本質を考察する問答を検討した。

2.1「三昧が持つ二つの要素」では、止と觀を区別する要素について論ずる問答を考察した。止と觀を区別するのは心の明晰さという要素の有無ではなく、それぞれの本質である心所の違いである。すなわち、三昧という心所が止であり、智慧という心所が觀である。

2.2「九種心住の本質」では、止の完成の準備段階となる九種心住の本質を論ずる問答を考察した。もし九種心住の各段階に生ずる三昧が心であるならば、それらは止であるとも觀であるとも規定し得ないことになる。また、それらの三昧は四作意によってもたらされるが、作意そのものではない。なぜなら一つの心の働きが作意であると同時に三昧であるというのは不合理だからである。九種心住は三昧という心所を本質とするものである。

2.3「止觀の本質」では、止と觀の本質を論ずる問答を考察した。『宝雲經』『解深密經』などのインド仏教典籍や『道次第大論』『ドゥクのゲェルワンとの問答』などのツォンカパの著作によれば、正規のものであれ非正規のものであれ、止の本質は三昧という心所であり、觀の本質は智慧という心所である。

## 第3章「止觀の修道論」

第3章では止觀修習の順序と止觀の所縁を考察し、止觀による修道論を論ずる問答を考察した。

3.1「止觀修習の順序」では、正規の止と正規の觀の獲得順序の原則を論ずる問答を考察した。初業者は最初に止を完成し、その止に依拠して觀を修習すべきであるという見解は毘婆沙師・經量部・唯識派・中觀派の体系および無上瑜伽タントラを除く下位タントラの体系において共通に認められる。完成した止の力なしに觀は完成し得ない。正規の止の完成に基づいて正規の觀は獲得されるが、その逆は成立しないというのが止觀の修習順序の原則である。

3.2「止観の所縁」では、正規の止の獲得から正規の観の獲得に至るまでの修習について詳細に論ずる問答を考察した。瑜伽行者は九種心住によって心を定め、如実または如量のいずれかを所縁とする止を完成する。その後、瑜伽行者は了相作意あるいは四念住によって空性を伺察し、その伺察によって導かれる軽安を獲得する時、空性を所縁とする正規の止を獲得する。さらに、その止に依拠して、空性を所縁とする観を完成し、それと同時に止観双運を達成する。以上のようにして止、観、止観双運が完成する。

3.3「所縁の目的」では、止観の所縁の目的を論ずる問答および複数の所縁に基づく修習の要否を論ずる問答を考察した。止観の所縁は特定の目的に適うものでなければならない。すなわち、浄行所縁は三昧に対する妨害の断滅と止の獲得、善巧所縁は法無我を対象とする観の完成、浄惑所縁は煩惱の断滅、念仏観所縁（本尊の姿）は資糧の完成と止の完成という目的に適うものである。初業者はこれらの全ての所縁を順に修習する必要はない。なぜなら、止の完成以前の段階では、心を安住させるために単一の所縁に依拠して止を完成しなければならないからである。止を完成して心の安住を得た段階に至ってはじめて多くの所縁に目を向けて止と観を修習することが可能となる。止観修習の究極目的は四静慮・四無色定の獲得ではなく、煩惱の断滅と解脱の達成である。煩惱の断滅のために最も重要なのが、無我を所縁とする止観の修習である。

## 結論

『静慮無色定大論』「止観節」の根底にあるのは、1)インドの諸典籍に見出される修習の理論を統一的に説明し、2)一人の瑜伽行者が歩むべき止観修習の道筋を示すという考えである。これらはいずれもツォンカパの『道次第大論』に現れる道次第思想に由来するものである。第一に、『静慮無色定大論』は、論理の厳密さを求める問答形式で止観に関する議論を記述している。これによって『声聞地』『解深密経』『修習次第』等の経論に説かれる止観修習に関わる術語の定義・分類が厳密に規定され、止および観には正規・非正規の二形態があること、止の本質は三昧であり、観の本質は智慧であることが明らかにされ、インド仏教の経論に説かれる修道論の統一的説明が図られる。第二に、『静慮無色定大論』は九種心住による止の完成から、空性を所縁とする観の完成に至るまでの修習の道筋を示した上で、その一連の修習こそが煩惱の断滅と解脱の獲得をもたらすのであり、四静慮・四無色定は必ずしもその目的に資するものではないとしている。これによって同書は、我々凡夫が属する欲界においても止観修習を通じて解脱の達成は十分に可能であることを示そうとしている。『静慮無色定大論』はゲルク派僧院で修道論を学ぶ学生のために書かれた教科書であることを忘れてはならない。この書を通じて学生が学ぶのは、論理的思考に基づく経論の厳密な読解法と、空性理解と解脱獲得をもたらす一連の修習に関する正確な知識である。『静慮無色定大論』は、空性思想を中心とし、論理的思考を重視するゲルク派の伝統における修道論研究の成果として位置付けられる。